

いじめ問題の社会心理学的研究

- 企画・司会者：吉田 俊和 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)
 話題提供者：大西 彩子 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)
 黒川 雅幸 (福岡教育大学教育学部)
 三島 浩路 (中部大学現代教育学部)
 指定討論者：坂西 友秀 (埼玉大学教育学部)
 本間 友巳 (京都教育大学教育実践総合センター)

《企画の趣旨》

いじめは被害者に、自殺企図や精神病、心身症、不登校などの悪影響を与えることが懸念されている(坂西, 1995; Rigby, 1998; 立花, 1990)。しかしながら、いじめの発生件数は横這い状態にあり(文部科学省, 2007)、依然として問題の解決に至っていないのが現状である。仲間はずれ・無視・悪口・嫌がらせ・いたずら、叩かれたり・蹴られたりといった被害を、週に1回以上経験している中学生が、1割程度いることが示されており(岡安・高山, 2000)、学校でのいじめは日常化していると考えられる。

本シンポジウムでは、社会心理学的観点より、いじめの研究を行ってきた3人の方に、話題提供をしてもらい、いじめ加害行動および被害者に対する学級や友人からの影響について考えたい。3人のテーマは、(1)いじめに対する学級集団規範、(2)仲間集団規範といじめ加害行動、(3)親しい友人間に見られる「いじめ」の様相と影響である。(1)大西は、いじめが起きやすい学級と起きにくい学級の違いをいじめの規範から捉え、学級規範が持ついじめ抑制効果について報告する。(2)黒川は、いじめが起きやすい年齢の子どもは、仲間の影響を強く受けるので、仲間レベルでの規範も重要であることを論証する。また、仲間規範の形成要因としての集団透過性について述べる。(3)三島は、親しい友人からのいじめの特徴と、心理的健康への長期的な影響について指摘する。

指定討論者は、いじめ加害者・被害者の認知に関する研究などで著名な坂西 友秀先生、加害者のいじめ停止要因を初めとする、教育問題全般について精力的に研究されている本間 友巳先生にお願いした。

《話題提供》

- いじめに対する学級の集団規範と生徒の加害傾向
大西 彩子

これまで、いじめの防止を目的として加害者や被害者に対する様々な実証的研究が行われてきたが(神村・向井, 1998; Pellegrini, 1998)、近年、いじめの集団プロセスが注目されるようになり、加害者の周囲の生徒がいじめに重要な役割を果たすことが明らかにされている(Gini, 2006; 森田・清水 1986)。

大西(2007)は、学級の集団規範と生徒のいじめ加害傾向との関連を検討し、いじめに否定的な集団規範が高い学級では低い学級と比較して、生徒のいじめ加害傾向が低いことを示した。これは、いじめに否定的な集団規範が高い学級では、いじめを行うことが周囲からの強い不評を招くことになり、いじめを行うコストが高くなるためであると考えられる。

集団規範とは、集団成員の相互作用の中で形成され、集団の全メンバーに認知されている一定の行動パターンにメンバーが同調するように作用する社会的圧力が合成されたものである(佐々木, 1963)。この社会的圧力によって引き起こされる同調行動については、Asch(1951)の研究以後、様々な研究がなされている。学校現場でのいじめへの対応として加害生徒や被害生徒の指導やカウンセリングをする際には、彼らを取りまく集団規範の様態を考慮する必要がある。さらに、いじめは教師の前で堂々で行われることは稀であり、日常的な観察による発見は容易ではない。学級の集団規範をいじめ防止対策として用いることができれば、教師がいじめの加害者を特定できなくとも介入することが可能である。本シンポジウムでは、学級のいじめに否定的な集団規範と中学生のいじめ加害傾向との関連を、Jackson(1960, 1965)によって提唱され、佐々木(1963, 2000)によって拡充されたりターン・ポテンシャル・モデルを用いて紹介し、学級のいじめに否定的な集団規範を用いたいじめ防止対策の可能性について考えたい。

■仲間規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響

黒川 雅幸

いじめ加害者のみならず、周囲の者も含めていじめ加害行動が生起することを考慮し、大西 (2007) では、いじめ加害行動を学級規範が抑制することが可能であることを示している。

しかしながら、児童・生徒が強い影響を受ける集団は、これまで検討されてきたような学級集団のみではなく、仲間集団の影響もあると考えられる。小学校高学年頃から、仲間の相対的な重要性は高くなり (Furman, & Buhrmester, 1992; 森・堀野, 1992)、仲間の目が気になり (三島, 1995)、仲間から逸脱することを恐れ、仲間と同じように振舞おうとする (Berndt, 1979; 藤原, 1976; Strassberg, & Wiggen, 1973)。また、仲間の影響で、いじめや問題行動が促進されることもあると指摘されている (Espelage, Holt, & Henkel, 2003; Kiesner, Cadinu, Poulin, & Bucci, 2002)。そこで、本シンポジウムでは、仲間集団規範がいじめ加害行動に及ぼす影響について検討した研究を紹介する。なお、三島 (2003) や杉原・宮田・桜井 (1986) の研究から、いじめには仲間をいじめる仲間集団内いじめと、仲間ではないクラスメイトをいじめる仲間集団外いじめがあると考えられる。また、井上・戸田・中松 (1986) によると、いじめの動機によって、こらしめのいじめ、異質性排除のいじめ、享楽のいじめに分類できることも指摘されている。これらの研究を基に、紹介する研究では、いじめの対象や動機ごとに分類を行った上で、検討を行っている。

さらに、仲間集団規範に影響する要因として仲間集団境界の透過性 (集団透過性; 黒川, 2006) の視点から論じる。仲間集団透過性とは、仲間集団成員以外の学級成員と相互作用がなされている程度を測定する概念である。仲間集団内いじめに関しては、集団透過性が低く、集団境界に壁があり、仲間以外の学級成員との関わりが希薄であれば、仲間以外の学級成員からいじめの存在を知られる可能性は低くなるので、いじめを行いやすくなると考えられる。また、仲間集団外いじめに関する集団透過性の影響は、集団透過性が低いことで、仲間と仲間以外といったウチとソトの関係に分け隔てることが起こるので、集団外成員に対する攻撃行動が高まり、いじめをより行いやすくなることが考えられる。

これらを踏まえて、いじめ加害行動を抑制するために、学校現場での対応を考えていきたい。

■親しい友人間にみられる「いじめ」とその影響

三島 浩路

親しい友人からいじめられることと、親しくない者からいじめられることとは、その影響などが異なるのではないだろうか。また、小学校高学年では、親しい友人間にみられる「いじめ」は、男子に比べて女子に多いという調査結果もある (三島, 2003)。そこで、小学校高学年女子児童にみられる「いじめ」の問題を、高校生約 2,000 人を対象に実施した調査の結果をもとにして浮き彫りにすることにより、いじめる者といじめられる者との関係による影響のちがいを考える議論の基盤を提供したい。

この調査の結果によれば、小学校高学年当時、親しい友人を頻繁にいじめた女子の半数 (50.9%) は、親しい友人から頻繁にいじめられた経験があると回答している。一方、親しくない者を頻繁にいじめた女子については、親しくない者から頻繁にいじめられた経験があると回答した者は 16.7% に留まっている。この結果から、親しい友人間にみられる「いじめ」では、いじめる側といじめられる側の役割交代が頻繁に起きている可能性が高い。

小学校高学年当時に親しい友人からいじめられた経験がある女子は、そうしたいじめを経験しなかった女子に比べて、進学先の高校などについての進路相談を、親しい友人にではなく、教師にすることが多いことを示唆する結果が得られた。また、こうした「いじめ」を経験した女子は、経験しなかった女子に比べて、親しい友人と同じ高校に進学したいという気持ちが弱いことを示唆する結果も得られた。ところで、女子に関しては、親しくない者からいじめられた経験の有無により、こうした違いはみられず、男子に関してもいじめられた経験の有無による違いはみられなかった。以上のことから、女子に関しては、小学校高学年で親しい友人からいじめられたことの影響が、友人関係という限られた側面にだけ表れるのではないことや、その影響が比較的長期に及ぶことが考えられる。

さらに、小学校高学年当時に体験した親しい友人からのいじめが、高校生になってからの友人関係に対する不安感などに影響を与える可能性があることも、この調査の結果から示唆された。

これらの結果を議論の基盤として、親しい友人間にみられる「いじめ」の問題を掘り下げていきたい。